スタンダールの『アルマンス』における女性抑圧と性愛－(2)

Sexualité et contrainte féminine dans《Armance》 de Stendhal－(2)

内田善孝
UCHIDA Yoshitaka

La sexualité dans *Armance* n'a pas attiré l'attention des chercheurs, parce que le héros est impuissant. Pourtant impuissance ne signifie pas absence de pulsion sexuelle. Stendhal parsème son texte de mots qui accentuent la pureté de l'amour des héros et la descrption physique de ses personnages ne descend pas au-dessous du cou. Armance, jeune orpheline, subit des contraintes sociales et économiques plus fortes que celles d'Octave. Leurs caresses dépassent rarement l'effleurement et, au moment où ils commencent à se communiquer leur amour, leur discours est soudain court-circuité: le discours indirect s'immisce dans le discours direct de leur tête à tête pour empêher les deux jeunes amants de s'avouer leurs sentiments sans l'intervention du narrateur. Cet état d'oppression dessiné par le roman représente la société française sous la Restauration. Pourtant la pulsion sexuelle chez Stendhal est plus forte que ces contraintes;, elle apparaît timidement d'abord dans une épigraphe et ensuite assez hardiment juste avant le dénouement. Octave est tout le temps comparé à Alceste, mais il a aussi les traits d'un autre personnage: ceux de Don Juan.

社会的抑制の中での性愛

ここでは性的抑制が非常に強力な社会で、二人の愛する若者がどのように愛を肉体的に表現するかを調べていく。オクターヴもアルマンスも自己抑制を課しているので、注意しないで読むと、この作品には性愛的な表現が非常に少ない印象を受ける。そしてスタンダール自身18世紀と比較して、19世紀を礼節が極端に尊重され、潤いのない風俗と非難しているので[注1]、王政復古の貴族社会のサロン風景は18世紀文学の性風俗とはひどくかけ離れているかのように思える。しかし性愛が『アルマンス』の二人の主人公の間でも認められる。

1）控えめな肉体接触

二人の主人公達の控えめな肉体接触について語るとき、アルマンスが行為の主体となる。両親のいない貧しい娘が貴族社会の中で生きていくために従わなければならない義務の規制の中で、アルマンスはオクターヴに手を握ることさえ許してはいけないと考えている。[注2] その結果、逆説的になるが、アルマンスにあっては手を握るのは愛情表現というより、むしろ愛情抑制の手段になっている。

< Elle craignait qu'Octave n'ajoutât quelque mot qui aurait augmenté son trouble et lui aurait fait perdre le peu d'empire qu'elle aurait encore sur elle-même. Elle redoutait surtout de parler. Elle se hâta de lui donner la main >.[注3]

自分の心の乱れをオクターヴに悟られないように、彼女は高ぶる気持ちを抑えて手を彼に渡す。話すことにより、自分の気持ちの乱れがオクターヴに悟られるのではないかとアルマンスは恐れている。話すことのほうが手を握ることより取り返しのつかない結果になる。手を握ることは乙女が主導権をとって行うことではないが、礼節が許す範囲でオクターヴにもたれてうっとりと幸福に酔いしれる。

< Elle s'appuyait sur le bras d'Octave et l'écoutait comme ravie en extase. Tout ce que sa prudence pouvait obtenir d'elle, c'était de ne pas parler; le son de sa voix eût fait connaître à son compagnon de promenade toute la passion à laquelle elle était en proie. >[注4]

感情がアルマンスの自己制御力から逸脱しそうになると、彼女は沈黙に引きこもる。言葉を恐れるだけでなく、言葉に付随する抑揚さえも信頼できず、自分の気持ちが漏れるのを止めようとする。それさえなければ、オクターヴの腕にもたれて陶酔にひたるのは許される。肉体接触を自らに禁止したアルマンスであるが、それが愛情を吐露する場合でなければ、抑制手段として、ある一定の範囲までの抑止力として認めている。

2）オクターヴを励ます愛撫

アルマンスの愛情の本質は献身的な愛である。自己を忘れて愛する者のためにすべてを犠牲にする。慎みは彼女に備わった生来の性質であるが、それをも捨てて、オクターヴの不能の苦悩を告白させて心の重荷を取り去ろうとする。

< Armance, oubliant sa retenue ordinaire, lui serrait la main avec passion et le pressait de parler; la figure d'Armance se trouva un moment si près de celle d'Octave qu'il sentit la chaleur de sa respiration. Cette sensation l'attendrit; parler lui devint facile. >[注5]

オクターヴの手をやさしく握り、アルマンスは心を開かせようと試みる。つい熱が入って彼女の顔

がオクターヴの顔すれすれに近づく。あたたかいアルマンスの息を感じて、かたく閉じた彼の決心が溶ける。不能の告白を制止していた羞恥心が解除され、もう一歩で秘密をアルマンスに語るところまでになる。

アルマンスの愛撫はエロスの衝動ではなく、献身的犠牲精神から発露しており、慎みが彼女の生来の特質である。結婚が十日後に迫ったときにも、アルマンスの献身的な愛撫はいっそう強められる。しかし偽の手紙により、オクターヴはアルマンスの愛情に不信を抱き、せっかく開けかかった心をかたくなに閉じてしまう。作者はアルマンスの慎みを強調しながらも、アルマンスがいかに献身的に愛撫をして、オクターヴの苦悩を和らげようとするかを描く。

< Dans certains moments d'humeur sombre, Octave allait jusqu'à voir dans les manières tendres d'Armance si peu d'accord avec l'extrême retenue qui lui était naturelle, l'accomplissement d'un devoir désagréable qu'elle s'imposait. [.....] Il eût été difficile, en effet, de rien imaginer de plus touchant et de plus noble que les manières caressantes de cette jeune fille ordinairement si réservée, faisant violence aux habitudes de toute sa vie pour essayer de rendre un peu de calme à l'homme qu'elle aimait. >[注6]

アルマンスとしては自分の性格が許す限りのぎりぎりの範囲で肉体による愛情表現を行うが、偽手紙により不信感に満たされるオクターヴの目にはアルマンスの愛撫は義務としか映らない。言葉によるコミュニケーションが不可能におちいり、アルマンスには肉体による愛情表現しか残されていない。手紙という言葉の集合体により持ち込まれた誤解は言葉では解除不可能である。愛情を証明するのは言葉ではなく、愛撫という肉体表現でしか可能ではない。

< Toutefois, vers la fin de cet intervalle de dix jours, l'extrême tendresse d'Armance lui donna quelques moments de faiblesse. Dans leurs promenades solitaires, se croyant autorisée par leur mariage si prochain, Armance se permit une ou deux fois de prendre la main d'Octave qu'il avait fort belle, et de la porter à ses lèvres. Ce redoublement de soins tendres qu'Octave remarqua fort bien et auquel, malgré lui, il était extrêment sensible, rendit souvent vive et poignante une douleur qu'il croyait avoir surmontée. >[注7]

アルマンスは結婚前の乙女に許されたぎりぎりの愛撫を試みる。< l'extrême tendresse >, < Ce redoublement de soins tendres >という極限の表現で描かれる愛撫とは、オクターヴの手を自分の唇にもっていくだけのことで、これまでの手と手の愛撫から、手と唇に変わっただけである。わずかな変化であるが、唇の愛撫がオクターヴのかたくなな決心を揺り動かす。

3）抑制が解除された愛撫

上述したように、アルマンスの愛情表現は自然な愛情の発露というより、自己抑制の手段であり、

オクターヴに対する献身的犠牲の精神の現れである。アルマンス自身の生来の本質とともに、彼女の貴族社会における経済的立場により慎みは義務にまで高められている。理性の抑制が愛情表現にまで及ぶアルマンスにあっては、抑制が除去され、自然に流れ出る愛情表現はないのだろうか。たった一回だけ彼女が理性を失う場面がある。それはオクターヴが決闘で瀕死の重傷を負い、運ばれてくるのをマリヴェール邸で待つときである。

< Cette personne si raisonnable avait perdu tout empire sur elle-même. Etouffée par ses sanglots, elle relisait sans cesse la lettre d'Octave. Dans l'égarement de sa douleur, en présence d'une femme de chambre, elle osait la porter à ses lèvres. [.....] Malgré ses sanglots, Armance entreprit de copier cette lettre, elle s'interrompait à chaque ligne, pour la presser contre ses lèvres. >[注8]

愛情表現の相手はオクターヴ自身ではなく、彼の血で書かれた手紙であるが、この個所だけでアルマンスが身近に召使がいることも忘れ、我を忘れて愛情の自然なほとばしりに身を任す。愛する者が死ぬかもしれないという状況の中で、最初にして最後に自分の感情にだけ従う。他者の目に映る自分の姿を始終管理していなければならないアルマンスにとり、他者の目が初めて視界から消える。

これまでの抑制が一挙に崩れ、対象が手紙であるにも関らず、まるでそれが書き手自身であるかのように、アルマンスは他者の目を気にせず激しく唇を押し当てる。この場面はアルマンスの情熱愛の本質を見せてくれる。彼女は社会を本来的には恐れていない。もし恐れているなら、ジュリアンなどのスタンダールの他の主人公のように、自分の心をあくまでも隠し通すであろう。一方乙女の評判が危険にさらされようと、もしそれが必要なら彼女は愛する者のために甘受する。アルマンスこそ『恋愛論』の第一章で示されている < Quelques femmes vertueuses et tendres > の模範例であり、< vertueuses >の本来の意味 virtus = 《mérite de l'homme》を十全に内包する女性と言えよう。

オクターヴの愛撫

1) エロスの衝動

アルマンスの愛撫を分析してみると、そこにはエロスの衝動が認められない。不思議なことだが、不能と設定されているオクターヴの方にエロスの衝動が見られる。

< Mais il était si étonné de ce qui se passait dans son cœur, si troublé par le beau bras d'Armance à peine voilé d'une gaze légère qu'il tenait contre sa poitrine, qu'il n' avait d'attention pour rien. Il éait hors de lui, il goûtait les plaisirs de l'amour le plus heureux, et se l'avouait presque. >[注9]

昼の熱さが残る夏のある夜、オクターヴとアルマンスは他の人たちから離れてアンディイの森を散策する。一般的に人物の肉体描写は顎から上に限定されるが、ここではアルマンスの腕が描かれてい

る。薄布の下に彼女の腕の輪郭がはっきりと見え、それをオクターヴは自分の胸に当てている。彼の心はアルマンスの美しい腕に惑わされ、幸福の快感に浸りきっている。

情熱恋愛には性愛の要素は不可欠条件ではないと『恋愛論』には述べられているが、アルマンスのほとんど裸の状態の腕との接触は、不能のオクターヴにも幸福の喜びを実感させる。アルマンスの美しい腕の感触はさらにあと二度も繰り返され[注10]、このささやかな接触がオクターヴをいかに性的衝動に駆り立てるかを示している。そしてついにはもっと明白な愛情表現にあやうく駆り立てる。< il s'en fallut bien peu qu'en la quittant il n'osait lui prendre la main et la presser contre ses lèvres. >[注11] 手の接触から唇の接触は性の解放を経験した我々には一見なんでもないことのように見えるが、先ほど調べたアルマンスの愛撫から判断すると、婚約期間中に許される限界である。さらには手や腕の接触以上に、唇はさらにエロスを感じる器官でもある。

ドーマル夫人からアルマンスを愛していると言い当てられ、苦悩の一夜を森の中で過ごした後、早朝アンディイの館に戻ってアルマンスに出会ったとき、オクターヴのエロスは抑制から解かれ、ほとばしりでる。気を失ったアルマンスを抱きかかえ、オクターヴは彼女の血の気の失せた手に立て続けに接吻する。< Pardon, ô mon cher ange, dit-il à voix basse et en couvrant de baisers cette main glacée, jamais je ne t'ai tant aimée. >[注12] オレンジの植え込みにより館の住人の視線から隠され、さらにアルマンスは失神状態で、オクターヴは自分の感情を抑える必要がない。だからといって愛情表現が抑制からまったく解放されているわけではなく、オクターヴの愛撫は愛する乙女の手を唇に当てて、唇の暖かさで冷えたアルマンスの手を暖めるだけのことである。

顔から下の肉体描写

ここまでの分析で『アルマンス』は常に性的抑制の下に置かれていることが分かった。肉体描写の比較の対象として『エルサレム解放』を引用したが、ここでも再度タッソをスタンダールと対照してみよう。前項で失神したアルマンスを愛撫するオクターヴについて記述したが、『エルサレム解放』にもほぼ同じような状況が描かれている。アルミドの魔法の力から解き放たれたルノーが彼女に再会する場面である。

< Armide se retourne; elle voit Renaud. Elle pousse un cri : ses regards, avec dédain, fuient un visage qu'elle adore. Elle tombe et s'évanouit. Tel un lis à demi coupé penche languissamment sa tête. D'une main Renaud la soutient, de l'autre il dénoue les nœuds qui captivent son sein.

Des larmes de la pitié il mouille et les joues et la gorge de cette beauté infortunée; elle revient à elle-meme, et soulève une paupière tout humide des pleurs de son amant. >[注13]

ルノーが自分の魅力から逃れて以来、アルミドは愛を憎悪に変え、復讐を誓ったはずだが、実際ルノーを目の前にしてみると、女心の弱さが出てしまう。彼女は失神して、ルノーの腕に抱かれる。ルノーは片腕でアルミドを抱き、もう一方で彼女の胸を覆っている衣服を解く。魔法から解き放たれて

も、ルノーの心には愛が芽生えており、涙がアルミドのふくよかな乳房を濡らす。官能的な場面である。

こうした官能的な描写が散在する『エルサレム解放』を愛読したスタンダールが、純愛的描写で満足しているだろうか。王政復古の貴族社会を描くからには社会的な抑圧を忘れることはできないが、作者スタンダールのエロスの発露があってもおかしくない。

肉体描写は顎から上の部分がほとんどであるが、まれに顔から下が描かれている場合がある。< Le grand châpeau de paille d'Armance, sa taille souple et légère, les grosses boucles de cheveux qui s'échappaient sur les joues >[注11] この文章でも髪の毛や帽子という顔の記述が中心になっているが、アルマンスの体つきがしなやかで軽やかと非常に簡単に描かれている。これはスタンダールの未婚の女性主人公に共通する体形で、ほっそりした若い女性の肢体が好みのタイプであろう。

アルマンスが失神して地面に倒れたとき、精神的苦痛を表すのに相変わらず顔の表情が使われるが、同時に描写が首から下におりてくる。

< Sans la secourir aucunement, Octave resta immobile à la regarder; elle était profondément évanouie, ses yeux si beaux étaient encore à demi ouverts, les contours de cette bouche charmante avaient conservé l'expression d'une douleur profonde. Toute la rare perfection de ce corps délicat se trahissait sous un simple vêtement du matin. Octave remarqua une petite croix de diamants qu'Armance portait ce jour-là pour la première fois. >[注15]

この文章にかかれているように、オクターヴは助けもせず、気を失って横たわるアルマンスの体を見ている。最初に彼が見るのは目であり、意識を失っていることを確認する。次に彼のまなざしは口に移る。そしてそこにアルマンスの心の中の動きを読む。オクターヴの目はここで止まることなく、さらに下におりていく。そしてアルマンスのきゃしゃな肉体を発見する。しかも夏の薄手の衣装をまとい、はっきりと体の線が分かる乙女の肉体を。彼の視線は最後にアルマンスの胸のダイヤの十字架にくぎ付けにされる。< Je veux dire par l'épigraphe qu'il regarda avidement sa gorge. >[注16] とスタンダールは自家本に書き込み、18章のエピグラフで < Sur son sein d'albâtre elle porte une croix brillante où l'enfant de Jacob imprimerait ses lèvres, et que l'infidèle adorerait. >[注17] と書いているように、彼が見ているのは乙女の乳房の谷間である。

オクターヴの視線を導くのはエロスの衝動である。二度目に同じダイヤの十字架をアルマンスの胸元に見たとき、オクターヴのエロスは自動的に反応し、衝動的に性的行為に走ろうとする。< Elle (la croix de diamants) était cachée ordinairement, elle parut par le mouvement que fit Armance. Octave eut un moment d'égarement; il prit sa main comme le jour où elle s'était évanouie et ses lèvres osèrent effleurer sa joue. >[注18] オクターヴは一瞬錯乱におちいり、我を忘れてアルマンスの頬に唇を当てようとする。オクターヴが瀕死の重傷を負ったとき、一度だけ理性を失ったアルマンスに比べると、オクターヴは自分で理性的、哲学者と思い込んでいるが、彼の方が自然状態に近い存在と言える。性愛の

面では、アルマンスが自己に課せた義務に従うのに対し、彼は自己の性的衝動に従う。

ここで不思議なのは、アルマンスの胸元を描写するのにエピグラフという迂回をしなければならないことである。テキストの中に < son sein d'albâtre > を入れないで、わざわざエピグラフを書き足している。[注19]「透きとおるほど白い胸元」はテキストの言語の許容範囲外にあり、エピグラフという口実のおかげでやっと作品の中に存在できる。

顔から下の女性の肉体を表現する言葉は避けられている。ボニヴェ騎士がドーマル夫人にむかって胸元を隠すよう言う場面がある。このとき < sein >, < gorge > などの単語はいっさい使用されず、タルチュフがドリヌに胸元を隠すようすすめる台詞 < *des choses que l'on ne saurait voir* >[注20] が引用されている。見てはいけない部分は表現してもいけないことになる。

性行為の表現

身体部分の表現の抑制は性行為そのものにも及んでいる。

『アルマンス』中、一回だけ性行為が示されている箇所がある。結婚式の後、オクターヴとアルマンスはドーフィネの領地をまわって、マルセーユに向かう。オクターヴはそこからギリシャに向けて出発することをアルマンスに打ち明ける。そしていよいよ最後の夜をふたりは過ごす。オクターヴの腕に抱かれたアルマンスが以下のように描写されている。

< la divine beauté d'Armance enivrée de bonheur, et *se pâmant* dans ses bras la veille de son départ. >[注21]

「アルマンスは出発の前夜愛するオクターヴの腕に抱かれて気を失った」は抽象的に表現されているが、性行為を意味しているのは明白である。しかしなぜこうした性行為の表現が必要なのか。オクターヴは不能に苦しむ主人公という設定であり、スタンダールはこの肉体的欠陥を何度か暗示しようと試みる。女性に性の快楽を与えられず、愛を信じきれずに死を選ぶ青年を描いてきたはずなのに、ここでは性の喜びに酔う新婦の姿が示されている。すなわち直接表現されていないが、オクターヴは性の快楽をアルマンスに享受させている。主人公の欠陥に薄々気づいてきた読者はこの箇所を読んで、迷ってしまう。オクターヴは性の快楽を与えることができたのか、なんだそれなら死ぬ必要はないのにと。デュラス夫人の『オリヴィエ』では、主人公は錯乱におちいり、ピストルで自殺する。愛の高揚の中で、ナンジス伯爵夫人との結婚の障害となっている自分の肉体的欠陥を告白できずに、オリヴィエは死を選ぶ。とうぜんふたりの間に性的関係は描かれていない。

なぜスタンダールは読者を迷わしかねない性行為を描いているのか。実はオクターヴが娼婦館に通う場面で、すでに疑問は生じ始めている。不能の青年がなぜ娼婦館に入り浸るのか。本論文の最初で主人公の無垢、純粋を強調したが、その一方で彼は娼婦館の常連客である。不思議に思いながらも、当時スタンダール自身が娼婦館に通い、キュリアル夫人から非難されたことを勘案して、それ以上深く探ることはなかった。しかしよく考えてみると、精神的純粋さとエロスは矛盾するものではないので、オクターヴはアルセストとドン・ジュアン二重の性格から構成されていると言えよう。アルセス

トは誇り高き＜人間嫌い＞を、ドン・ジュアンは抑制不可能な性の衝動を示している。

これまではオクターヴの不能が前面に押し出されて、彼のもう一面、ドン・ジュアン的側面が無視されてきた。エロスはいささかも精神的高潔さと相対立するものではなく、その良い例がバイロンであろう。

２章の最後で、オクターヴが『ドン・ジョヴァンニ』をピアノで弾くシーンがある。なぜモーツアルトの作品がここに挿入されているのか、その必要性はこれまでよく分からなかった。スタンダールは固有名詞を利用して、謎を隠す愛好者であり、ここでも『ドン・ジョヴァンニ』はオクターヴの性格を暗示するのに使われている。同じ章の少し前でオクターヴがアルフィエリの悲劇を読む場面があるが、これもアルフィエリの自尊心過多の性格を主人公に重ねる前置きである。ドン・ジュアンとオクターヴの関連は生理的不能のせいで不可能と思われ、誰も注意をしなかった。だがアルセストとドン・ジュアンの二重性は可能であり、第３章という比較的最初の章に、アルフィエリとドン・ジュアンが記されているのはスタンダールの創作の意図がすでにこの時点で示されていると考えてよいだろう。

こうした観点に立つと、1826年12月23日付けのメリメ宛の手紙を再度見直す必要がある。まさしく上記に引用したアルマンスの性的エクスタシーに関して、スタンダールはこの手紙で以下のように述べている。

< En 2826, si la civilisation continue, et que je revienne dans la rue Duphot, je raconterai qu'Olivier a acheté un beau g..... portugais, en gomme élastique, qu'il s'est proprement attaché à la ceinture, et qu'avec ledit, après avoir donné une extase complète à sa femme, ou une extase presque complète, il a bravement consommé son mariage, rue Paradis, à Marseille.

Quand on est songe-creux, homme d'esprit, élève de l'École Polytechnique, comme Olivier, voilà ce qu'on fait. Donner des extases avec la main, ... a été l'objet des méditations d'Olivier pendant toute sa jeunesse. Il faut que vous sachiez qu'il passait sa jeunesse chez les filles; c'est ce que j'ai cherché à indiquer modestement. >[注22]

手紙のこの箇所には、男根形のゴム製の＜張形＞、＜手でエクスタシーを与える＞などの卑猥な表現があり、文面がそのまま受け取られず、むしろスタンダールが年下のメリメに自分の放蕩の経験豊かさを誇示するためにこうした表現を使っていると考えられてきた。＜マルセーユの天国通り＞で腰に男根形の張形を固定して、新婦に天国に上るような性的快楽を満喫させて、結婚の初夜を誇らかに済ませたという叙述には、たしかに言葉の遊びなどがあり、年長者スタンダールのからかいの調子も含まれているかもしれない。だからといって文面を無視してよいわけではない。マルセーユに＜天国通り＞は実在し、メラニー・ギルベールとの青春の甘い快楽の思い出が隠されている。

オクターヴが理工科大学卒業の知的青年貴族で、メランコリックな人間嫌いだと規定されると、我々はどうしても謹厳実直な聖人君子像を作り上げてしまい、それと矛盾する記述は無視してしまう。上

記の手紙で、オクターヴは頻繁に娼婦館に出入りし、娼婦達を相手に手でエクスタシーを与えられるかどうか試していたことを忘れないで欲しいと、スタンダールはメリメに念を押している。それなのに、主人公のこの側面に注意を払う研究者はいない。オクターヴに対する不能のアルセストのイメージがあまりに強力すぎて、ドン・ジュアンのイメージは片隅に押しやられているどころか、まったく影さえ認めてもらえない。

それに手紙のこの箇所を文面通り理解すると、別の本質的な問題が起こる。すなわちオクターヴが自殺する理由が消滅してしまう。生理的不能により結婚生活、とくに性生活を維持できずに自殺するという解釈は崩れてしまう。アルマンスに性的充足を与えられるのなら、オクターヴは苦しむこともなく、生理的不能は絶対的な障害とはなり得ない。そうなると「不能」の解釈は社会的な意味で使われるべきで、オクターヴの死は社会との軋轢から生じたことになる。[注23]

結論

オクターヴの新しい一面が発見された。生理的不能者であっても、エロスを感じ、性の衝動に身を任すことは可能である。気を失ったアルマンスの胸元にじっと見入るオクターヴ、＜天国通り＞で新婦をエクスタシーに上りつめさせるオクターヴ、それに娼婦の館に通って性技を磨くオクターヴ、このように羅列するとこれまでのオクターヴ像が一新される。生理的不能という障害のために、我々は一面的にしか見てこなかった。偏見により彼にはエロスはないものと断定してきた。オクターヴがスタンダールの分身だとするなら、[注24] こうした性の衝動は当然発露すべきであり、これまでたんに見落とされてきただけである。

スタンダールとメチルドの情熱恋愛が強調され、プラトニックな恋愛関係が小説の主人公においても注意を引きやすい。しかしスタンダールの日記や書簡を読むと、「恋」だけでなく「色」の道にも通じていたわけで、片方だけが作品に発現し、他方は押し込められているとは考えられない。

さて本小論の冒頭で問題提起をしたが、『恋愛論』第1章で情熱恋愛に身を焦がし、性欲を制御できる女性に対置されているのは自尊心過多の性の快楽主義者である。一見すると意外なこの対置も、情熱恋愛の本質を言い当てているだけのことである。21世紀の我々にとり、恋愛は解放されている。ところが王政復古下のフランス社会においては、若き男女の自由恋愛は、少なくとも貴族階級にあっては存在しなかったか、ほとんどまれだった。この事実を忘れてはいけない。男性にとり恋愛の対象は、『トリスタンとイゾルデ』以来同様、結婚した女性であった。『恋愛論』の対象もデンボウスキー夫人マチルドであり、スタンダールが愛したと『アンリ・ブリューラールの生涯』で告白している大多数の女性は既婚だった。『恋愛論』が世界中で翻訳され、たくさんの人に読まれるにつれ、この事実が忘れられてしまった。『恋愛論』のスタンダールの分身、リッジオやサルヴィアッチの不幸なかなわぬ恋を読むと、恋い焦がれる既婚の女性に言い寄る一方、彼らが娼婦館に性欲のはけ口を求めていたとは想像しにくいかもしれない。しかしそれが現実で、キューリアル夫人からスタンダールも娼婦館通いを非難されている。

『恋愛論』第1章の一見奇妙な対置は情熱恋愛の真の姿を表しているだけで、スタンダールのエゴ

が赤裸々に出ている。女性の献身的な愛により自尊心過多の男性が目覚めて、情熱愛に昇華していく。まさしくこの構図が『アルマンス』に読み取れるのではないだろうか。

註

注1 Voir *Armance,* Cercle du Bibliophile, p.232.

注2 Voir *Ibid.,* p.235.

注3 *Ibid.,* p.78-79.

注4 *Ibid.,* p.155.

注5 *Ibid.,* p.277-278.

注6 *Ibid.,* p.298. Souligné par nous.

注7 *Ibid.,* p.296. Souligné par nous.

注8 *Ibid.,* p.208.

注9 *Ibid.,* p.156.

注10 Voir *ibid.,* p.157 : < Octave n'était pas encore remis de l'ivresse qui venait de s'emparer de lui; il voyait toujours ce beau bras d'Armance pressé contre sa poitrine. >

注11 *Ibid.,* p.157.

注12 Voir *ibid.,* p.173.

注13 *Jérusalem délivrée,* p.471, chant 20.

注14 *Armance,* p.170.

注15 *Ibid.,* p.172.

注16 *Ibid.,* Notes, p.331.

注17 *Ibid.,* p.169.

注18 *Ibid.,* p.230-231.

注19 研究者はこれがシラーからの引用ではなく、スタンダールの手になると考えている。Voir les Notes de H.Martineau, Garnier Frères, p.297, et celles de M.Crouzet, Robert Laffont, 1980, p.1028.

注20 *Armance,* p.239.

注21 *Ibid.,* p.301.

注22 *Avant-propos* par R.Lebègue pour *Armance,* p.XXXV-XXXVI.

注23 参照：松原雅典、『スタンダールの小説世界』、みすず書房、1999年、p.73-80.

注24 同上、p.34.